

序

わが国でラジオ放送が開始された1925年から5年後の1930年に設立された放送技術研究所は、今年で80周年を迎えた。80年の歴史を振り返ると、白黒からカラーテレビ放送へ、ハイビジョン、衛星放送、デジタル放送と、研究所の歴史はわが国と世界の基幹放送メディア開拓の歴史であった。放送メディアの実用化にあたっては、放送方式のみならず、それを支える広範な基盤技術の研究開発が必要であると同時に、標準化への取り組みも重要な課題となり、研究着手から実用化まで20年以上の年月を要することも珍しくない。そして、1つのメディアが実用化される頃には次のメディアの開拓に着手しなければならないという、まさに世代をまたぐ一大事業である。



この10年史がカバーする10年(2000~2009年度)を振り返ると、デジタル放送の実用化とわが国のISDB方式の国際展開、放送と通信が融合する社会に対応するためのさまざまな技術とサービスの開発、そして、スーパーハイビジョンや立体テレビとこれを実現するために不可欠な要素技術の研究開発が本格化した10年であった。1990年から1999年までの10年がデジタル放送の研究開発の時代であったとすると、この10年は、まさにポストデジタル時代の基幹メディアに向けた研究開発が本格化した10年と言えるだろう。

この間、スーパーハイビジョンの大規模展示を2005年の「愛・地球博(愛知万博)」で実施した。研究開始から10年後のことである。ハイビジョン初の大規模展示は、研究開始20年後の「国際科学技術博覧会(筑波万博)」であった。ハイビジョンでは20年かけてやったことを、スーパーハイビジョンでは10年でやったわけで、技術革新のスピードが格段に速くなっていることを示している。また、2008年には、スーパーハイビジョンの国際伝送実験を、衛星伝送と、光回線を用いたIP伝送で実施した。ハイビジョンのときは、1988年にインテルサット衛星で国際伝送したのが初の実験であった。ここからは、技術の質に変化があることが見てとれる。

社会も技術も質的な転換がめざましいスピードで進む中、研究所における活動の記録を10年史として後世に残すことにより、気持ちを新たに次の時代を目指した研究開発を推進していかなければならない。この10年間、ご指導いただいた多くの方々に感謝するとともに、次の10年史が編纂される2020年には、この10年史に記録された研究開発の多くが実用化されていることを期待したい。

2010年12月

日本放送協会

専務理事・技師長 永井 研二

永井 研二